

教育長 様

校番 009 尾道東高等学校長
(全日制課程)**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る
学科等の特色を生かしたカリキュラム開発研究指定校
令和5年度 実施報告書****1 学校の教育目標等**

(1) 教育目標

自主・自律 一地域や国際社会で活躍する人材の育成一

(2) 育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力

《育てたい生徒像》

- 知識を活用して困難な課題にも柔軟な態度で挑戦していく生徒
- グローバルな視点を持ち、多様な人と協働して新しい価値を生み出せる生徒

《本校で育成を目指す資質・能力》

- ① 仮説を立てる力
- ② 理由づける力
- ③ 創造する力
- ④⑤コミュニケーション力（聞く力・話す力）
- ⑥ 主体性・粘り強さ

(3) 学科等の特色

普通科「国際教養コース」があるという強みを生かし、言語活動の充実や国際理解を深める取組を学校全体で推進している。これらの取組が「国際教養コース」のみならず、学校全体のものとなるよう「尾道東高等学校 グローバル人材育成計画」を策定し、取組を進めている。具体的には、「外国語コミュニケーション能力の育成」を目指した授業でのディベート活動等に加え、姉妹校などの短期・長期留学生の積極的な受け入れや派遣を行いながら「多様な価値観と出会う経験の充実」、そのような活動で身に付けた力を発揮しながら「他者と協働して学び、課題発見・課題解決していく力の育成」等の目標を設定し、本校を卒業し、地域や国際社会で大きく活躍できる人材の育成に力を入れている。

また、平成30年度から「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る研究開発校として、本校で付けたい資質・能力を整理し、それを育成するための「総合的な探究の時間」の全体計画等の抜本的な改革を行っている。これにより、3年間を通じて課題発見・解決学習に必要な資質・能力を総合的に育成するための土台を完成させることができた。それに伴い、「総合的な探究の時間」の取組内容や研究の質が以前よりも向上しており、生徒も自らが設定した課題の解決に向け、積極的に取り組むようになってきている。

そして、本校においては、課題発見・解決学習に必要な資質・能力を「総合的な探究の時間」のみならず、各教科・科目等でも育成するという方向性をもって本プロジェクトの取組を進めている。これまでの成果として、各教科の学びのつながりを重視するための、カリキュラム・マップを作成することができた。今年度はそれらの取組をベースに、本校で育成を目指す資質・能力と各教科・科目の目標との間にあるつながりを見いだすツールとしてイメージマップを作成した。

これらの活動を通して、「総合的な探究の時間」にとどまらず、数値化できる学力だけでなく、これからの社会で中心となり、様々な課題に直面しても解決に向けた手立てを考え、解決に導くことができる力を身に付けた人材の育成に取り組んでいる。

2 研究の概要

(1) 学科等の特色を生かしたカリキュラム開発の重点目標

他校と比べた際の本校の一番の特色は、普通科「国際教養コース」があるという点である。「国際教養コー

ス」は、平成14年度から文部科学省より「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール」研究指定校を受け、英語ディベートの取組を継続的に行ってきた。ディベート活動は、単に「外国語コミュニケーション能力」を高めることに繋がるだけでなく、本校で育成を目指す資質・能力を総合的に育てていくのに有効な手段となっている。また、国際教養コースの生徒の取組を中心として、グローバルな社会を実感する場面が充実しており、他校に比べ国際社会とかかわり意見交流をする機会が多い点が本校の強みである。

第1学年で行う「尾道探究」と第2学年及び第3学年で行う「課題探究」においては、十分な事前調査を行うことができず、問いの掘り下げが弱いまま研究を進めてしまう生徒がいることが本校の課題である。ディベート活動で行うような多様な意見に耳を傾け、それを考慮しながら振り返り、自分の主張を組み立て直すという過程を繰り返し踏むことで、問いを深く捉え、研究を進めていくことが可能になると考える。対話的に思考を深めていくためにディベートを取り入れた取組を継続していきたい。

また、昨年度からの研究指定校の取組の一つに、「総合的な探究の時間」と各教科等との関連を見いだすことが挙げられている。本校で育成を目指す資質・能力とのゆるやかなつながりを見いだしながら、単元計画やパフォーマンス課題、各授業での展開や問いを考察し、実践する機会を設け、学校教育全体を通した資質・能力の育成を図っていきたい。

(2) 1年後の目指す学校の姿

社会の変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、自ら課題を設定し、他者と協働して解決策を探究し、提案することができる「資質・能力」を身に付けた生徒を育成するという視点に立ち、「総合的な探究の時間」で行う「尾道探究」、「課題探究」において、各教科・科目で身に付けた資質・能力が関連付けられ、統合された形で発揮されるよう教育活動を行っていく。

具体的には、これまでの「課題発見・解決学習推進プロジェクト」の取組で確立してきた指導法・評価方法を各教科・科目、さらに教科横断的な学習において実践し、より効果的な形で資質・能力を育成するために、学校全体のカリキュラム・マップやシラバスを整備するとともに、育成を目指す資質・能力と教科の目標とのゆるやかなつながりを見いだすためのイメージマップの作成、また、評価についても、各教科及び教科横断的な学習についての具体的な評価ルーブリックの完成を目指す。

(3) 令和5年度の目標

ア アウトプット（活動指標）

- ① 「総合的な探究の時間」を中心として、学校として育成を目指す資質・能力についてのルーブリックを活用し、教員による評価及び生徒自身による自己評価を用いて、生徒の学習状況を適切に評価することができている。
- ② 前年度に検討した「総合的な探究の時間」における評価に基づいて、評価実践をすることができている。
- ③ 年度当初に設定したシラバスに基づき、各教科において、年に1回は教科横断学習を行うことができている。

イ アウトカム（成果目標）

- ① 第1学年の「総合的な探究の時間」において、「仮説を立てる力」「理由づける力」「創造する力」「聞く力・話す力」「主体性・粘り強さ」について、レベルB（4段階の下から2つ目）以上の力を身に付けている生徒の割合が90%になっている。
- ② 第2学年の「総合的な探究の時間」において、「仮説を立てる力」「理由づける力」「創造する力」「聞く力・話す力」「主体性・粘り強さ」について、レベルA（4段階の下から3つ目）以上の力を身に付けている生徒の割合が60%以上になっている。
- ③ 第3学年の「総合的な探究の時間」において、「仮説を立てる力」「理由づける力」「創造する力」「聞く力・話す力」「主体性・粘り強さ」について、レベルA（4段階の下から3つ目）以上の力を身に付けている生徒の割合が90%になっている。

(4) 令和5年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア カリキュラムの核とする教科・科目等名

- ・第1学年～第3学年の「総合的な探究の時間」

イ カリキュラム開発の概要

① マクロレベルの視点

本校で育成を目指す資質・能力については、昨年度の課題を踏まえ、資質・能力の育成を通して本校の教育目標や育てたい生徒像の達成を目指した。そのため、それらの資質・能力を「総合的な探究の時間」の探究活動の取組の段階ごとに評価を行う際に用いる「段階別評価ルーブリック」を作成していたが、ルーブリックの表記やその内容に不十分な点があった。そこで、今年度の取組を進める中で「段階別評価ルーブリック」の文章を用いて評価実践を行い、評価項目の見直しを図っている。

② ミクロレベルの視点

学校の教育目標の達成や育成を目指す資質・能力の向上に向けて、「総合的な探究の時間」のカリキュラム改善と実践を行った。

「総合的な探究の時間」においては、探究のサイクルを回す中で探究活動の深まりを目指していたものの、生徒が主体的に学ぶ様子が見られず、探究学習ではなく調べ学習で終わってしまうという課題が各学年で見られていた。そこで各学年の取組を踏まえ下記のような工夫を行いカリキュラムの改善を行った。

第1学年においては、生徒が地元地域の課題発見と解決を目指す「尾道探究」に取り組む前に、より身近な課題について考え、探究のサイクルを回すため、「自己探究」及び「学校探究」に取り組んだ。「尾道探究」では、新聞記事やパンフレットなどから尾道に関する記事を集め8つのテーマに分類を行う「尾道マッピング」や、根拠やデータを明確にして論理的に説明する「ディベート活動」を計画的に実践した。探究をする上で必要となる、多角的・多面的に物事を捉えるという意識を生徒が獲得できるようにすることで、地元の課題を様々な視点から見つめ、解決策を考えることができるよう工夫を行った。

また、第2学年では、生徒が「課題探究」に取り組む前に、デザイン思考について学び、課題設定に必要な視点を身に付けた。具体的には、困りごとを抱えている人（ユーザー）が求めるもの（ニーズ）を取り入れ、課題を解決する方法を設定する（デザインする）思考について学んだ。また、ディベート活動においては、実社会で起きている課題について取り上げることで、社会への関心を高めつつ、論理的に説明する力の育成を行った。これらの活動を行うことで、自らが探究する課題を設定する際に広い視野で社会を見つめることができるよう工夫を行った。

そして、第3学年では、第2学年から引き続き「課題探究」を行ったが、最終的なレポートの作成を行う前に、研究の進捗状況や調査結果等を発表する場面を多く設けた。発表を通して、他者からアドバイスや質問を受けることを通して、違った視点から考察をしたり、さらなる実験・調査を行ったりするきっかけとなるよう指導を行った。

ウ 校内体制

教育研究部を中心として、「総合的な探究の時間」を軸に、教育活動全体で資質・能力の育成ができるよう、全教職員を巻き込めるような取組を行った。

具体的には、職員会議での研修会を通して、各学年の取組内容や現状の共有を行うとともに、相互授業観察を通して、資質・能力を育成する校内体制の構築を行った。

今年度は「資質・能力と教科学習との関連性」をテーマに、それぞれの教科・科目の学びが、どのような資質・能力との関係性が深いかを考え、それらを教科の学習を通して間接的に育成することを目指した授業実践を行った。あえて別の教科の教員同士でグループを作ることによって、資質・能力に着目した授業実践、授業観察を実施することができた。また、各グループでの振り返りを研修会で共有することによって、すべての教科・科目に育成したい資質・能力との関連性があることを共有することができた。

(5) 学習評価

今年度は、第1・2学年において、取組の段階ごとに特に育成したい力を抜粋し計画的に資質・能力の評価を行った。生徒に事前に評価基準を示すことによって、生徒が各活動において何が求められているのかを具体的に把握するとともに、より高い目標を達成するために何が必要なのかを考えることができ、結果として成果物の質を向上させることにつながったと考える。

また、「学びみらいパス」の結果についても、教職員を対象とした研修会に加え、生徒への研修会も実施し、結果を返却するとともに、生徒自身が資質・能力の現状について把握し、これからの行動の改善につなげられるようにするため、ワークシートを用いた振り返りを行った。

(6) カリキュラム評価

昨年度実施した第1学年の「尾道探究」において、解決を目指す地域課題を設定する段階で問題点が見られた。具体的には、設定する課題の規模が大きすぎて解決策の提案が一般論的なものになってしまったり、探究のサイクルを回すというよりも、調べたことをまとめるだけで、実験や調査などを通して検証を

行う場面の設定が難しかったりした点である。そのため、尾道市が抱える地域課題に正対していない解決策を提案してしまったり、主体的に課題解決に取り組むことができなかつたりする様子が見られた。

そこで、今年度は第1学年の取組内容を「自分探究」「学校探究」を経て「尾道探究」へつなげた。いきなり地元尾道の課題に取り組むのではなく、自分自身や本校で学校生活を送る上で生徒たちが見出した課題に着目することで、より身近で、解決することの意義をより見出しやすくすることが目的であった。

第2学年においては、デザイン思考を学ぶ単元を設けることによって、ユーザーの視点に立って本質的な課題を発見し解決を行うプロセスを学び、以降の課題探究に役立てた。

3 令和5年度の成果及び課題

(1) 成果

① 育成を目指す資質・能力のうち「理由づける力」の育成が進んでいる点

今年度の生徒質問紙調査の中で、「理由づける力」と関連が深い、「物事を筋道立てて考えようとしているか」という質問に対して、第1学年は73.5%、第2学年は82.2%の生徒が肯定的な回答をしていた。

また、第1学年「総合的な探究の時間」での評価において、本校で目指すべき資質・能力についてレベルB以上の生徒の割合が100%であり、目標の90%を達成することができた。

「学びみらいPASS」においては、「仮説を立てる力」と比較的関連性が高いと考えられる「情報分析力」の項目について、また「コミュニケーション力」と比較的関連性が高いと考えられる「対人基礎力」の項目において、第1学年及び第2学年ともに、本校の強みであるという結果を得た。

要因としては、ディベート活動の取組の中で、多角的な視点で物事を捉えることができるようになっていくことが考えられる。「学びみらいPASS」の「情報分析力」や「対人基礎力（統率力・協働力）」の数値が高いことから、ディベート活動の正の影響が出ていると考えられる。また、「資質・能力と教科学習との関連性」をテーマとして行った相互授業観察においても、「理由づける力」は各教科の学びの様々な場面で関連するものであったため、教員が授業の中で意識的に「理由づける力」を活用することによって、生徒に無意識のうちに浸透し、数値が大きく伸びたのではないかと考えられる。

② 育成を目指す資質・能力と各教科との関連性が生まれてきている点

今年度2回実施した相互授業観察での取組もあり、育成を目指す資質・能力と各教科の授業の学びとの関連性があることについて、教職員の理解が進んでいるように感じられる。また、授業評価アンケートにおいても、生徒に授業での学習を通して特に身に付いたと思う資質・能力を回答させ、指導者が考える付けさせたい資質・能力との間に乖離がないか確認させるなどして、教科での指導を通して全教員が参画するシステムづくりが行えていると考える。

(2) 課題

① 育成を目指す資質・能力のうち「理由づける力」以外の資質・能力の育成が進んでいない点

今年度の生徒質問紙調査の中で、「仮説を立てる力」と関連が深い、「ある事象がなぜ起こるのか、仮説を立てて検証しようとしているか」という質問に対して、第1学年は40%、第2学年は46.7%の生徒しか肯定的な回答をしていなかった。

また、第3学年「総合的な探究の時間」において、本校で目指すべき資質・能力についてレベルA以上の生徒の割合が58%であり、目標の90%に到達しなかった。第2学年においても、レベルA以上の生徒の割合が38.4%にとどまっており、目標値を達成することはできなかった。

「学びみらいPASS」においても、第1学年及び第2学年とも「課題発見力」の数値が全国平均と比較して低い傾向にあり、課題の解決策を見出す力が十分に身に付いていないことが明らかとなった。実際に、第1学年の「尾道探究」や第2学年での「課題探究」においても、課題の設定には時間をかけることはできているが、その解決策の提案などは実証や実験が難しいため十分でない現状があり、「理由づける力」以外の資質・能力を育成する仕組みづくりが求められている。

② 育成を目指す資質・能力の項目が生徒に浸透していない点

今年度の生徒質問紙調査の中で、「自分たちの学校がどんな資質・能力を生徒に育成しようとしているかを知っているか」の肯定的な回答が、第1学年で64.2%、第2学年で72.6%となっており、「自分は学校が育成を目指す資質・能力を身に付けているか」の肯定的な回答が、第1学年で50%、第2学年で60%となっている。昨年度の数値と比較して、それぞれ数値は向上しているとともに、資質・能力についての教職員への周知も進んでいるものの、生徒自身が本校で育成を目指す資質・能力についての理解を深めていくことが引き続き課題である。

4 令和6年度の研究目標及び取組内容

(1) 令和6年度の研究目標

ア アウトプット（活動指標）

- ① 「総合的な探究の時間」を中心として、本校で育成を目指す資質・能力についてのルーブリックを活用し、教員による評価及び生徒自身による自己評価を用いて、生徒の学習状況を適切に評価することができている。
- ② 前年度に検討した「総合的な探究の時間」における評価に基づいて、評価実践をすることができている。

イ アウトカム（成果目標）

- ① 第1学年の「総合的な探究の時間」において、「知識・技能」「仮説を立てる力」「理由づける力」「聞く力・話す力」「主体性・粘り強さ」について、レベルB（4段階の下から2つ目）以上の力を身に付けている生徒の割合が90%以上になっている。
- ② 第2学年の「総合的な探究の時間」において、「知識・技能」「仮説を立てる力」「理由づける力」「聞く力・話す力」「主体性・粘り強さ」について、レベルA（4段階の下から3つ目）以上の力を身に付けている生徒の割合が60%以上になっている。
- ③ 第3学年の「総合的な探究の時間」において、「知識・技能」「仮説を立てる力」「理由づける力」「聞く力・話す力」「主体性・粘り強さ」について、レベルA（4段階の下から3つ目）以上の力を身に付けている生徒の割合が90%以上になっている。

(2) 令和6年度のカリキュラム改善の内容及び校内体制

ア カリキュラム開発の概要

ディベート活動で身に付けた力をその他の活動と関連付けることに加え、「総合的な探究の時間」で実施をする第1学年の「自己探究」や「学校探究」、第2学年のデザイン思考での学習内容を、資質・能力の育成につなげられるようなカリキュラムの検討と実践を行う。

また、資質・能力について必要があれば項目や定義を変更し、本校の教育目標や育てたい生徒像との関連性を深めていく。

イ 校内体制

教育研究部を中心として、「総合的な探究の時間」を軸に、全ての教育活動で資質・能力の育成ができるよう、全教職員を巻き込んだ取組を目指す。

そのため、少なくとも三回の教育研究部主催となる研修会を通して、各学年の取組内容や現状の共有を行うとともに、活動の様子や成果物を評価し、その評価結果についても共有することで、すべての教員が参画する場面を作っていきたい。また、「総合的な探究の時間」だけでなく、本校で育成を目指す資質・能力の検討やそれらを育成するための授業づくりを検証する機会を設けていく。

また、各教科・科目等と資質・能力の関連性を深めるため、定期考査における活用問題の作成を継続することに加え、育成を目指す資質・能力のイメージマップを用いて、資質・能力の定義等について検討する場面を設けていく。

さらに、各教科においては、教科主任会議や校務運営会議で協議した内容を、教科会等を通じて全教員に情報を行き渡らせる。各教科が必要に応じて実践報告を行い、全教員が研究に参画できるような体制を作っていく。